幻の「白樺特集号」
『公共的良識人』07年2月号掲載予定の原稿

ここに掲載する原稿について。

2006年12月23日に【金さん・武田さんを軸にした白樺討論会<第5回白樺討論会>】が開催されました。実はこのとき、参加メンバーの感想文を公共的良識人紙に載せるという企画も進んでいました。が、残念なことに感想文を載せるという企画の方は編集部の都合により、お流れとなってしまいました。

「民知」に共鳴する皆さんの書かれた文章が、おそらくは「進みすぎて」いて、従来の「公共哲学」運動の中に位置づかないと判断された故のようですが、この「白樺特集号」が「学」を職業としている皆さんに読まれれば、大変よい刺激となり、運動の前進に寄与したのではないかと思われます。とても残念です。

その幻の「白樺特集号」の原稿をご紹介します。ここに掲載する13名の方の文章は、金泰昌(キム・テチャン)さんからの依頼＝「白樺特集」を組みたいので、12月23日の「白樺討論会」の感想を参加者のみなさんに書いて頂きたい＝を受けて、討論会参加者の方が暮から正月にかけて書き上げたものです。

（ただし、最初の私・古林治の文は、金泰昌さんからの依頼により、「この討論会に至った経緯と概略」を書いたものです。）

1.《12/23 金さん・武田さんを軸にした白樺討論会》の意義 …… 3
古林 治（52 歳 システム・エンジニア／白樺教育館 副館長）……3

2. 討論会体験—本当の対話とは？ …… 7
染谷 裕太（東洋大学2年・20才）……7

3. 神様にならないために …… 8
竹内 茉莉香（高1）……8

4. 自由な対話で「共異体」の社会を …… 9
目黒 久美子（看護学校生19才）……9

5.「公共哲学」の公共とは？ …… 10
古林 到（法政大学 1 年法学部政治学科）……10

6. 公共哲学へのエール …… 11
綿貫 信一（38歳・環境調査コンサルタント）……11

7. 異なる者が混在して生きる原理 …… 12
杉山 幸男（公務員）……12

8. 金先生と武田先生を囲んで …… 14
清水 光子（76歳）……14

9.「白樺思想と大学の公共哲学」 …… 15
荒井 達夫（公務員・52才）……15

10.「偉い・劣る」とは無縁のところから希望はひろがる」 …… 17
染谷 ひろみ（46才・主婦）……17

11.《大いなる希望「民知」》 …… 18
楊原 泰子（60歳）……18

12. ふつうの言葉で討論を …… 20
中西 隼也（青山学院大学経済学部4年）……20

13. 哲学を革命する民から始める公共哲学 …… 21
内田 卓志（会社員） ……21

1.《12/23 金さん・武田さんを軸にした白樺討論会》の意義

古林 治（52 歳 システム・エンジニア／白樺教育館 副館長）

経緯

昨年 12 月 23 日に金泰昌（キム・テチャン）氏（以下、金さん）と白樺教育館館長 武田康弘氏（以下、武田さん）を軸にした白樺討論会が開かれました。この討論会の意義について振り返ってみることにします。

まず、その経緯について触れておきます。

最初のきっかけは、白樺教育館の「民知の理念」に熱い共感と深い感動を持たれた金さんが 2005 年 6 月 15 日（水）に武田さんとの会談のために白樺教育館を訪れたことでした。5時間に及ぶ会談の後で、金さんは武田さんに『公共的良識人』紙への原稿を依頼したのです。それが2005年7月号の【出会いと民知と公共哲学】です。

その後、金さんは再度原稿を依頼します。『民知の思想と運動を広げるために、「哲学」とは？「公共」とは？をその視点で明らかにしてほしい』と武田さんに要望したのですが、それが『公共的良識人』紙 2005 年 10 月号掲載の【民知・恋知と公共哲学】です。

さらに、話だけではなく具体的な実践に直に触れてみたいという希望で、金さんは昨年1月に白樺教育館の大学生クラスの授業に参加されましたが、授業の前には、【民知】の発想をベースに「公私共媒」の市政を実践する我孫子市長の福嶋さん（今年1月まで3期12年を務め退職）と武田さんとの三者会談を行い、その底に流れる【民知】を肌で感じ取られました。

続けて金さんは、昨年 6 月に、教育館の大学生クラスの授業の中で白樺同人との討論的対話を試みました。会の後、いくつかの疑問が白樺同人から提出され、それが 12 月 23 日の会への積み残しの課題となったわけです。その課題には、『公共哲学とは何なのか。』という根本的な問いも含まれていました（「白樺教育館」ホームページ・6．3金さんとの対話の感想をご覧下さい）。

実は、この間（昨年の 6 月から 12 月まで）、金さん以外の方たちとの討論会も行われました。ネット上での議論をきっかけに9月 9 日には、山脇さん（東京大学大学院 山脇直司教授）と荒井さん（白樺同人）の討論。10 月 8 日には稲垣さん（東京基督教大学 稲垣久和教授）と私・古林の討論を中心とする会。このときは稲垣さん著『靖国神社「解放」論』をめぐっての質疑応答から入りました。次に、12 月 9 日には、山脇さんと武田さんとの討論、【哲学とは何か？「主観性の知」をめぐって】をテーマとする討論会が行われました。この一連の討論会を通じて、参加した白樺同人には公共哲学に関しての漠然とした疑念が浮かび上がってきました。言葉を変えれば、それは公共哲学の広がりを妨げる問題が見えてきたプロセスと言えるかもしれません。

金さんおよび白樺同人はそのような問題意識をもって《12/23 金さん・武田さんを軸にした白樺討論会》に臨むことになったわけです。

12/23 討論の様子と意義

さて、本題です。12 月 23 日は午後 1 時から 6 時 50 分まで、厳しい異論・反論を織り交ぜ緊張感に包まれながらもジョークの飛び交う楽しい討論が行われ、それまでの討論会と比べると一歩も二歩も踏み込めたという印象でした。公共哲学とは何なのか、【同】ではなく【異】を前提にした『公共性』という考え方の重要性、等など。金さんのすさまじい体験を通しての説明によって『よくわかる感覚』がやってきたのでした。特に、『公共哲学とは公共する哲学である。』という結論に至るまでのお話は、明快で圧巻でした。その意味ですばらしく実のある討論会だったといえます。このことは金さんには大いに感謝したいと思います。

ただ一方で、これまで他の方々を含めて何度も討論してきたにもかかわらず、この『よくわかる感覚』がやってこなかったのはなぜでしょうか？その理由について考えてみる価値は大いにあるでしょう。なぜなら、それを解決することが公共哲学を広めていくための大きなステップになると考えられるからです。単刀直入に言うと次のように言い換えることになります。『今回の討論会では金さんという存在が公共哲学を伝えてくれましたが、他の人では中々伝えられない、あるいは金さんの書かれたものだけでは中々伝えにくい、これはなぜなのか。』

この問いを念頭にもう一度、12/23 の討論会の内容で象徴的な場面を振り返ってみます。以下、私なりに要約してみます。

議論の出発はこのような感じです。

武田さん:『客観知（答えの決まっている知）が偉いという観念を捨てよう。自分の頭で納得できる形で吟味しよう。客観学は知の手段であり、主観性を鍛え深めるのが知の目的である。そこに比重を置き「生活世界」に根ざす知が民知である。だから、民知が公共性を開く、とは当然の帰結だろう。ただ民知を実体化して捉えてはいけない。それは、知の遇し方、対応の仕方のことである。』

金さん:『東大受験や国家公務員試験など、知は立身出世のための知、官知、制度知と化してしまっている。小・中・高に至るまですべての教育がそうなっている。一方で、自分の命を輝かせるような知の使い方、人間が人間らしく生きるための知、基本中の基本の知、民知がある。この二つはしっかり区分けした方がよい。民知とは人間形成の無限の原動力になり得るもので、その民知を育てることが豊かな生に結びつく。官知・専門知はあとからいくらでも身につけることが可能だ。ところで、哲学するとは自足的に自分を見つめること、他者との関係を立て直し新しい関係を築くことだと思う。ただし、これまでのような同を前提とする共同性という考えでは【他者】を生かすことは難しい。【他者】とは自己に回収され得ない存在で、異を前提とする公共性の考えが必要だ。私にとって公共哲学とは、公共性という考えが事実上のさまざまな問題にどこまで役に立つか、どのように役に立つか、具体的な働き

としての公共性について考えてみようということだ。だから公共哲学とは、定式としての考えがあって現実にそれを当てはめるわけではなく、【公共する】=対話する・共働する・開新する(各個人が新しい次元を開く)ことそのものなのである。』

続いて、これまでの討論会での問題について触れます。

『これまでの討論会では、原理(理、権利)、現実上の話(事)、働きにもとづいて考える(用)話が混乱して語られることがあり、それがわかりにくさを生み出してきた。たとえば、【公・公共・私】が原理であるかのように聞こえる。』という武田さんおよび白樺同人からの指摘に対して、

『【公・公共・私】は原理ではなく用の一つに過ぎない。混乱の原因の一つは、公共哲学がまだ非常に若い生まれたばかりの学問であること。二つ目は、やむにやまれぬ切実な思いがなければ、思考は身体化しないということ。これが事・理・用の区別がつけられない理由ではないかと思う。』という回答が金さんからありました。

ここから両者の微妙な、興味深いズレが現れてきます。

『ただし、原理は極めて重要で繰り返し説明する必要があるが、原理のみにこだわるのは原理主義に陥る。現実を踏まえ、原理を踏まえ、働きにもとづいて具体的にどう対応するのかが重要である。また、人それぞれの心の満たされ方は多様であり、そのことを認める必要がある。』これが金さんのスタンス。

『原理をしっかり掌握する努力がまず必要。学者であればなおさら。そのことをはずしたら学問そのものが成立しない。原理を掘り下げること、生活世界の言葉によって常に吟味し続けること、それが原理主義を乗り越える道でもある。まず、なぜあなたは公共哲学に取り組むのか?そう問う事から始めればよい。自身の欲望をしっかり自覚することは、意識の明晰性をもたらし、足が地に着いた考え方・言い方に変わる。単なる客観学(知)からの離脱である。また、よき多様性は、生活世界の現場から立ち上げる知=民知が原理上の出発点であり、その上にさまざまな専門知が乗っかっているという自覚から生まれる。』これが武田さんの主張。

さらに議論は続きます。

金さん:『生存そのものにかかわる知を生命知というならば、今の時代は専門・分化が進んで生命知・生活知のようなものが失われてしまった。それぞれの人がそれぞれの生きる制度の中で専門知を育むことになる。そうすると、私自身の生命知(実体験)だけでは対話不能になり、そこでさまざまな違いを媒介する知が必要だと感じるようになった。それが公共知です。』

武田さん:『専門知を媒介する知というより、生活世界からの基盤知につくことではないか。生活者としての喜怒哀楽から出発する必要がある。そうでなければ皆の心に届くリアリティーのある思想にはなりにくい。』

参加者一の長老である清水光子さん:『ゼロからの出発、生命の根源の自覚からすべて

は始まるという金先生のお話は世代が近いこともあり、大変共感するところです。それは、中国・韓国・日本がもっと仲良くするためにも大事な考えだと思います。』

大学生の息子さんを持ち、近所の幼子の親から相談も受ける染谷博美さん:『公共哲学も一番大切なのは、子どもたちの問題だと思うが、それを考えるには、現状をよく知ることが必要ではないですか？生命知という話も分かりますが、ほんとうの出発点は、みなの生々しい日々の生活にあるはずだと思います。』

目指すものを共有しながらも微妙な差異が見られました。そこに公共哲学を広めていくための重要なポイントが潜んでいるように思います。この差異をさらに掘り下げる対話ができれば、より面白く、深い了解がやってくるのではないでしょうか。

最後に、途中での発言がなかった人から感想、質問、意見が出ましたので、そこでの金さんとの質疑応答を記しましょう。

高校一年生の竹内茉莉香さん:『確かに幼い子の場合には、大人考えの押し付けが悪影響を持つが、私たちの年令になれば、自分の至らなさを大人のせいにしてもダメで、自分自身で考え、問題を解決していく努力が必要だと思う。公共というのは誰かが決めることではなく、私たちがそれぞれ意見を出し合うなかから生まれるもの』

金さん:『ああ、確かにそうですね』

看護学校生の目黒久美子さん:『「共同体」ではダメだと言う金さんお話には共感しました。私は「共異体」という考え方が大事だと思います。』に対して金さん:『単なる「同」でも単なる「異」でもない「和」が大事ですので、「共和体」という考えがよいと思います。』

更に、なぜ「哲学する」ではなく「公共する哲学」なのか？という内田卓志さんの質問に対しては、ポリスという小規模な都市国家の時代とは違い、巨大な国家が誕生した後の哲学は、公共することが必要になるとの金さんの回答がありましたが、これについては、内田さんの書かれたものをご参照下さい。

締めくくりとして、武田夫人から『金さんは全力を出し「燃え尽きる」とおっしゃっていました。主人とは燃え方が違いますが、お互いにこれからもよく燃え続けてほしいと思います。』との話がありました。

ところで、最初にそれぞれ 3 分間スピーチで討論を始めようとしたのですが、金さんのスピーチは 30 分近くになりました。これですと、対話というより講義の側面が強くなってしまいます。その点をどうするか？は今後の課題の一つですが、次回が楽しみになってきました。「自由で対等な対話を繰り返し実践しなければ、共働も開新もない。案じるのではなく、とにかく身を挺してやってみるべき」というのが武田さんの考えですが、その点は金さんも同意見のようです。【異】を前提にした『和』の醍醐味を期待します。金さんの決断と努力が大きな実を結ぶような予感がしています。

2. 討論会体験—本当の対話とは？

染谷 裕太（東洋大学2年・20才）

白樺教育館で行われた一連の討論会に参加し、振り返ってみると、凄い体験をしたなと思います。

討論会の中では全く意識していませんでしたが、大学教授があのような場に参加し、普通の市民と討論するというのは中々無いことでしょう。来てくださった金泰昌さん、山脇直司さん、稲垣久和さんには大変感謝しています。

しかし、議論の仕方については疑問を持ちました。私は一連の討論会の中で、いわゆる「普通の市民」と、学の世界に身をおく「学者」との違いを感じました。そして、この「違い」は深刻なものだと思います。私は討論会に参加し、そのやり取りを目の当たりにし、終わった後「これは討論になっていないな」という感想を持ちました。

その主たる原因は大学教授の方にあると思います。討論会に参加された大学教授の方々は、大変博識で、色々なことを知っていると思いました。しかし、博識なために？討論の最中、次から次へと本の名前や人の名前、聞きなれない術語や横文字を出していました。そのせいで話の内容が深まっていかずに、あちこちに話が飛び、雑然としてしまったように思います。学者同士でならそれで通じるのかもしれませんが、我々一般市民がその話を聞いて、「知識が豊富だ」、「物知りだ」という感想は持てても、その話に「なるほど」と納得を得る人はほとんどいないと思います。

また、意見の主張の仕方も、これでは誰も深く納得しないと思いました。例えば、「和という概念は大切だ」（9月9日の討論会）という主張がありました。しかし、これではただの一般論で、まるで説得力がありません。「なぜ、自分はその概念が大事だと思うのか」、「どのような自分の具体的な体験があり、そう思うのか」が言われなければ、聞き手も現実的な、身近な事として聞くことができないと思います。言葉だけが空虚に響き、頭の中の想像の話で終わってしまうのではないでしょうか。

また一般論にとどまった思想や主張では、「本当にそう思っているのか？」と疑念さえでてきます。今回、「公共哲学と民知」が全討論会を通して大きなテーマでしたが、私はその中の具体的な内容よりも、対話する、議論するということについて考えさせられました。対話にはもちろん相手がいて、その相手と話すわけですが、その時にきちんと、お互いが真正面から向き合わなければ対話は成立しない。少しでも逃げたり、斜に構えてしまったら、それはもう有益な、生産的なものにはなりえない、ウソの世界になってしまう、と強く感じました。相手と真正面から向き合えば、裸の自分をさらけ出すことになると思います。それは恥ずかしい、怖い事かもしれませんが、それを超えたところからしか本当の生は始まらないし、本当の対話にはならない、自戒も込めて、私はそう思いました。

3. 神様にならないために

竹内 茉莉香（高1）

人の内面を型にはめることは簡単です。
私が私の基準に基づいて思ったように図り、
「優しい人」だとか「冷たい人」だとか
そういう風に私の好きな型を選んで図鑑の中に
その人のページを作ればいいだけです。
自分にわかりやすいように人を型にはめると、
その人を理解したような気分になれて人と接するのがとても簡単になります。
人と接するのが簡単に、単純になればそれはそれで幸せじゃないか、
と思うこともあります。
誰かの感情を気にしたり、気を使ったり、しないで、
私の思いたいように人を見ていればいいのですから。
でも私にとってそれは幸せではないし、
それは他人を巻き込んで不幸な話だと私は思います。
なぜなら、人を型にはめてしまうと、
私は自分の世界の中でだけ神様のようになんでもわかっている存在になり、
その人も私も結局私の中で作り上げられた
バーチャルな世界の完璧な住人に留められ、
それ以上成長することは決してできなくなります。
そのバーチャル世界では私はなんでも知っている神様で、
他人は変わることのないAという存在、Bという存在でしかなくなります。
でも、それは、私にとってとても不幸せなことなのです。
私は私の中に作り上げたバーチャル世界の中の神様になって
成長できない人間になんてなりたくない、
だからこそ他の人と「対話」をするんだと、
そこに対話の意義があるのではないかと考えました。
私の中からわき上がってくる感情にさえ近いような言葉によって誰かと話し、
「異」に気づく事によって私の中にある「世界像」はどんどん変化し、
決して私はその世界で神様にならないで成長し続けられるのだと思います。
だから対話が必要なのです。
バーチャルな世界の王様、神様にならないために。
そして、対話は私の中からわき上がる言葉によって成されなければ意味がありません。
その人の感情や経験が伴わない机上のお話は、誰も成長させてはくれないでしょうから。

4. 自由な対話で「共異体」の社会を

目黒 久美子（看護学校生19才）

「異なることを認め合い、生かし、共に生きていく。この関係を私は共異体、と呼びたい。」
12月23日の白樺討論会に参加して私はそう感想を述べた。

多くの人は、共同体＝和につながると思っているだろうけれど、私はそうは思わない。
そもそも、「同化して生きる」ことが、和に繋がるのだろうか。
むしろ、ひとそれぞれ自分自身の考えがあり、美学があり、信じるものがあるなかでなぜ他の人と「同化」しなくてはならないのだろうか。

最近、よく思うのは、普段は「個性」を主張しているのに、何か意見を言うときになると、みんな誰かが言ったことに同化してしまうんだなぁ、ということだ。
服やキャラクター性は個性で、自分自身の意見は個性ではないとでも言うのだろうか。
なんだか、まわりのひとたち（日本人は、とひとくくりにしていいものなのか疑問だが）は、集団の空気に支配されているようだ。多数がイエス、と答える中で、自分だけがノーと言うと、自分が異質でおかしなものだと感じてしまう。例えそれが「正しい」ものだとしても。
そして、誰か周囲の人と同化することによって、自分は異質ではない、という安心感に浸る。
そういったものが「共同体」なのだとすれば、もうそんな言葉があらわす生き方はこの世界からなくしていかないといけない。

同化したところで、やはり心の底には自分の意見や主張はあるのだから、不満はでてくる。
その不満は、本来自分がやりたい・こうしたという思いそのものから生じる。
心の声＝欲が満たされないままに活動していても、ぜんぜん楽しくないだろう。
結果として、同化してもまったく和(和やかに・仲良しに)にはならない。

本来の和とは、異の尊重、違いを認め合う気持ちがあってこそ成り立つものだ。
異、は悪いことではない。他人の異を認めることにより、自分の意見、つまり他人にとっての異も認めてもらえるのだから。
異なるものが共に生き、働くことこそが本当の「和」である。異がなければ和も生じない。
共同体という名の不和の中で生きるより、自分の異を出し成立する和の中で生きていくことのほうがよっぽど楽しいはずだ。

と、いうことを頭でわかっていても、なかなか実行できないこともある。

そんなときは練習をすればいい。
顔と顔をつき合わせて話す、ということを。
どんな話でもいい、お互いの意見を聞き入れ、ときに批判し、話をすすめていくことが、おのずと共異体というよき関係をつくっていくことになるのだと思う。そのためには、知識の量や地位や立場や年令などにとらわれず、内容で話をすることが必要になるはず。

5.「公共哲学」の公共とは？

古林 到（法政大学１年法学部政治学科）

私は、金さんがいらした時の討論会には参加出来ませんでしたが、9月9日の「山脇直司さん・荒井達夫さん」と10月８日の「稲垣久和さん・古林治さん」の討論会には参加しました。また、大学の講義で公共哲学を履修し、ほぼ毎回聴いていました。ですが、それにも関わらず、未だに「公共」の意味はよくわかりません。

これは大学に入ってから私が感じたことですが、一般の人が理解できないような難解な言葉を並べ立てるのが学問であり、それを流暢に出来るのが学者だ、という風潮が日本の大学教師の方々にあるようです。故に、話を聞いていても結局何が言いたいのか要領を得ないことも多く、「公共」の概念についてもピンときません。

私なりの解釈としては、現在の「民」と「官」が対立した社会、あるいは人々の社会や政治に対する無関心・無気力を憂い、このような状況をなんとかしたいという想いから「公共哲学」が生まれ、そしてそのために、よりよい社会の姿として、民も官も越えて、そこに生きる全ての人が共につくっていく社会領域・「公共」を提示しているのだと思えます。

しかし、もしそうだとしたら、公共哲学は大学人以外の沢山の人にも納得され、広まっていってはじめて意味のあるものになるのでしょう。にもかかわらず、私だけではなく、多くの学生が「分かりにくい」と思うのは、重大な問題であるはずです。

全ての学問は人々がよく生きていく上の必要から生まれたものであり、そうである限り、ふつうの人に理解されないような社会の学問には存在価値がないと思います。ましてや公共哲学のように、皆に理解されるかどうかが生命線のものであるなら尚更です。アカデミックな世界だけで通じ、「分からない人は分からなくていい」というスタンスでいいはずがありません。

また、「公・公共・私」という三元論は話を余計ややこしくしているように思います。あくまで主権者は「民」に属する市民一人一人であって、「官」は主権者の意志の代行者でしかない。この大前提を踏まえて言えば、そもそも民と官が分離し、対立してしまっていること自体がおかしいのではないでしょうか。ならばまず「きちんと民意を汲み取る『官』」にしていくた

めの条件を考えることが先決です。そうした上で「官」が担えないもの、必要性のないものは、市民や民間が、あるいは市民や民間と行政が共にやっていけばいい。

「社会生活の全ての基本は市民一人一人の意志・言動にあり、その自覚を高めることで『市民社会』を確立していこう」、という言い方がよほどストレートで分かりやすいのではないでしょうか。それを公共(する)哲学と呼ぶ、とすれば皆の理解が得られると思いますが。

6. 公共哲学へのエール

綿貫 信一 (38歳・環境調査コンサルタント)

2006 年 12 月 23 日の白樺民知の会で、＜公共哲学＞と、＜白樺の哲学・民知・恋知＞とで共通する部分が多いことが分かりました。しかしそれでもなお、公共哲学に対しての違和感を払拭しきれませんでした。

何故、公共(する)哲学なのか？ 何故、公共なのか？ 金さんの説明を聴いて、公共(する)とは、非常に有用な概念であるとは思いましたが、しかし普通に哲学ではなく、敢えて公共哲学と名打つ以上は、公共という中心概念を原理の次元にまで掘り下げる必要があると思うのです。金さんのお考えは、確かに力強い「理論」ではあると感じましたが、ふつうの多くの人が「なるほど」と納得する次元にまで掘り下げられた「原理」ではないな、と感じたのです。どこをどうしたらよいかを見定めて詳論する力は私にはなく、印象批評の域を出ない意見ではありますが、正直そう思ったのです。

次に、公共学ではなく公共哲学である以上は、原理としての哲学＝認識論を元にしたものでなければならないと思います。しかし、私は何度も討論会に参加し書籍も何冊かは読みましたが、「公共哲学」においては哲学的思考の原理である認識論の探求は非常に稀薄であるように感じました。純哲学の原理である認識論を踏まえれば、各自の主観を掘り下げることが第一義的に重要であることが明確に意識され、社会理論が成立する大前提である生きられた主観性をそれとして追求する道が開けるはずです(「客観」とは背理である・「真理」の保持者はいない)。そうなれば、社会問題を考えるのに、ふつうの生活者と学者との原理上の優劣は消えて、本当の実のある討論が可能になるはず。認識論の原理を踏まえることで従来の大学知のありようを革命しなければ、真の公共も哲学も開けず、広がりをある範囲に留めてしまう結果になると思われます。

最後の疑問点は、以上の論点と重なりますが、公共哲学の向いている先が主に、大学関係者等のアカデミックな世界であることです。金さんのお話から、先ずは学知の世界から

変えていこうという思いは良く分かりましたが、公共哲学が公共哲学として学的世界を変えていくためにも、何よりも先ず、一人一人の市民が主体者になるような思索と実践を必要とするはずだと思います。そのための最も重要な方法が、参加者全員が一市民（生活者）の立場で行うほんとうの討論ではないでしょうか？新しい知識の伝達＝授業とは異なる話し合いです。

もし、公共哲学が真に哲学＝恋知としての哲学になるまでに思索を深め、対話を繰り返すことができれば、学的世界はおろか、現実の社会変革につながる力を持つものになると思われます。

私は12月23日の金さんのお話を聴いて、白樺の「民知」の考えと多く共通するものを感じました。公共哲学には公理・公式はない、対話（対話・共労・開新）のダイナミックな展開の実践こそが公共哲学だ、というのはまったく深く共感するところです。これから更に対話、討論を重ねて、市民・生活者から始まるほんとうの公共する哲学を実践していけたら面白いと思います。学者の方も一人の生活者としての立場で思考しなければ真の公共、真の哲学にはならないはずです。

7. 異なる者が混在して生きる原理

杉山 幸男（公務員）

私は、30年以上子どもと関わる仕事をしてきて、時代と共に子どもを取り巻く環境が、物心両面で荒んでくるのを見てきました。子どもと真っ向から付き合い、彼らの感じるもの、求めるもの、それを何とか共有する中で、伸び伸びと育ってくれる事を願ってきました。しかしながら、学校をはじめ世の中の変化は、したたかな生命力を持った子どもたちの生活スタイルを変え、何よりものの考え方を変えていったと思います。知識の多い者が優れている。テストでいい点を取る者が、クラスの中心になる。こんな構図ができあがっています。多少くせがあっても人を惹きつける力のある者や、ユニークな発想をする者、教師や大人に逆らう者は、だんだん隅っこに追いやられたり、排除されてきました。私のいた場では、むしろそういう子が生き生きと力を発揮していました。

そんな中で、どうしても世の中の方がおかしい！どうしたらこの子たちがもっと伸び伸びと育つ事ができるだろうかと考えてきました。具体的には、もっと面白い事、みんなで群れて遊ぶ楽しさをたくさん体験させてやりたいと考えてきました。

一方で、こういう事を仕事としていると、組織の決め事や、世の中の常識が邪魔をするも

のです。子どもの側に立つと、大人から睨まれ、大人の側に立つと、子どもを抑制するといった葛藤が出てきます。自分の中では、多くの子どもたちから学んだ事に確信を持っていても、組織や社会常識にだんだん押しつぶされて来ていました。

そんな時、武田さんをはじめ、白樺の人たちと出会う事ができ、目からうろこが落ちるような思いでした。私のやってきたこと、立とうとしていた地平は、決して間違ってはいなかった！何かをしようとするとき、どのように考えるのか？どこに焦点を当て組み立てていくのか？これこそが、民知ではないかと思うようになりました。

一人一人の生活している場、一緒にいる仲間、その中での自分の存在から出発する。こんな当たり前の事が、実は世の中ではほとんど行われていません。特に子どもの社会では、子ども自身の欲求や疑問が、大人の先取りした考えや、子どものためになると決め付けた答えを、一方的に押し付けることでつぶされています。こういう実態を目の当たりに見ながら生きてきた者にとって、白樺は光明でした。

私は、難しい学問レベルでの哲学など、まったく興味もないし、わからない世界にいますが、白樺で「公共哲学」について、この間何人かの人たちの話を聞き、学ぶ機会を得ました。仕事が公務員なので非常に有意義なものでしたが、正直言って大学の講義を受けているような、教科書を読まされているような感覚を覚えました。私のように現場で生身の子どもと関わっている者にとっては、とても実感のない話でした。私の無知のせいとも考えたのですが、他の方の感想からも「実社会に具体的に切り込むものではない」などの話を聞き、まんざら私の持った感想も的外れではないなと思いました。

その中で、異彩を放っていたのは金さんでした。彼の実体験の重さはもちろんのこと、そこから具体的に「世の中を変えていこう」という話には、とても熱を感じ感動しました。学問の世界というより、人の生きる場に直結した所で活動している感じを受けました。公共哲学の理論や仕組みについてはよくわからないまでも、私の生き方や考えにビンビン響いてくる話で、「生きた考え」と感じました。

人は社会の中でしか生きられないわけで、どうしても「公共」という概念や意識を実態を持ったものとして身につけていなければならないと思います。私のような公務員は、特に仕事がそこに直結しています。結論から言うと私の仕事での公共性は、お上（行政）の作ったモノであってほしくないと思っています。子ども自身が、仲間とぶつかり合い、一緒に群れ遊ぶ中で自らの中に作り上げていってほしいと思うのです。もちろん社会生活を営む上では、最低線のルールは必要ですが、それは大人の都合で作られたものであってほしくないのです。「仲良くすること」を身に付けるためには、喧嘩や対立が不可欠です。その体験のないところで、頭ごなしに教え込まれた「仲良くしている風（ふう）」など、あっと言う間に壊れます。自らが、どうしたら仲良く（共に）楽しく過ごせるかを子どもの時に学んでいない者が、

大人になってまともな自立した社会人になれるはずがありません。虚構の平和は一発の銃弾で壊れると言います。私は、自分の生きる場での公共性をそんな風に考えています。そこに響いて来ない公共哲学。学問としての公共哲学など、子どもたちにとって、市民にとって、はたして役に立つのでしょうか？←

私が直接子どもたちに公共性を教えるなどということはありえません。子どもたちが自ら作り上げるものだと思います。共に楽しむために、共に生きるために、どうしたらいいか？強いて大人の役割を言うなら、それができる環境（余裕のある時間とできるだけ自由な場）を保障することではないかと思っています。また子どもにとって、生まれて初めての学ぶ場は家庭ですから、公共哲学は家庭からと言えるのではないでしょうか？だとすると、親もまたこの事について、きちんと学ぶ必要があります。そのための「公共哲学」であってほしいと思います。

「公共性」とは、異なるものが混在するための原理。そこから「対話すること」「共働すること」「開新すること」が生まれる。この話を金さんから聞き、深く感銘を受けました。この主体となる自分の生きる原理こそ、民知ではないかと思い至りました。はたしてそうなのかどうか？実践の中での確信はまだ不十分な気もしますが、これからも「異なるものが混在するための原理」を大切にし、そこにこだわって生きていこうと思っています。（了）

8. 金先生と武田先生を囲んで

清水　光子（76歳）

金先生の戦後ゼロからの出発とおっしゃったのが私には良く理解出来ました。私も激しい変化に生きるのも困難な時代を経験していたからです 。

しかし、戦後生まれの方が大半をしめる現代では、戦争の残酷さ平和の有難さも思いが違っていると考えられます。世代や生活環境の変化で、考えの出発点は大きく異なるようです。

それぞれの方が、いま現在自分達の生かされている場を踏まえて、ありのままの素直な感覚で物事を見、深く考え 善いものを求め、善いものに喜びを見出だして行く事が大切ではないでしょうか。

みなの経験や生活の場が違っても、いまを生きる点では同じです。お互いの経験や生きる場の違いをよく理解し合い、そこから一緒に哲学を深め広げて行くのが皆の土台となる知、「民知」です。私は、これからも自分自身が納得出来る生き方をしたいと思います。

9.「白樺思想と大学の公共哲学」

荒井　達夫（公務員・52才）

白樺教育館では、金泰昌さん、山脇直司さん、稲垣久和さん、の3人の大学人との座談会や討論会が開催され、私はそのほとんどすべてに参加してきました。それらを通じて、私は、白樺教育館で行われている哲学の実践と大学の公共哲学には本質的・根本的な違いがあることを知りました。

例えば、東京大学出版会のシリーズ「公共哲学」では、あたかも「公・私・公共三元論」が公共哲学の原理のように書かれていますが、民主制社会において、民の支持しない官＝「公」を想定するのは、原理論的には成立しないはずです。現実問題として「官」がイコール「公」であるかのような事態が続いてきたことは事実だとしても、それは原理の問題ではないと考えます。「二元論的発想ではダメだ。三元論的発想にならなければ問題は解決しない。」という言い方は、見方・方法を哲学の原理にしてしまっているように聞こえます。これでは、多くの人の納得が得られず、結局、大学人が一般人を啓蒙するという時代遅れの哲学運動にしかならないはずです。

私は武田康弘さんが提唱する民知としての白樺哲学を学ぶことによって、大学の哲学の大きな欠陥は、書物からの哲学的知識の吸収ばかりで、生活上の現実に即して個々具体の問題を生活者の立場からていねいに考えるという作業がないところにある、と考えるに至りました。

ただし、この点は、金さんと一般の大学人の方々とでは、まったく異なるように思われます。金さんの場合は、ご自身の強烈な実体験に基づいて哲学論を展開されており、その並はずれた説得力の強さは「公・私・公共三元論」という理論などではなく、金さん個人の人間的魅力、その存在そのものから出てくるように思われました。

なお、金さんは、12月23日の討論会で、三元論は公共哲学の原理ではなく「用」＝現実運動上の働きの理論である、と説明されました。

また、民主社会における公共哲学は「民から開く」もの以外にありえませんが、その点でも大学中心で行われている公共哲学には問題があると考えています。「民から開く」という視点は、日本社会の歴史と現状を考えれば、いくら強調しても強調しすぎることはないと言えるほどに重要ですが、大学の公共哲学では、その点の認識がまだ非常に弱いと思います。なぜなら「民の公共」と言うだけで、それが現実具体的にどういうことなのか、極めて不十分な説明しかされていないからです。また、どうしたら「民の公共」が実現するのか、その可能性を広げ、現実のものにするためにはどうしたらよいかについては、ほとんど説明がないという状況です。

金さんが強調する「対話」（対話する・共労する・開新する）の重要性は、当然のことであり賛成ですが、では、なぜそれが今まで日本社会ではできなかったのか、どうすればできるようになるのか、そのために必要な哲学の原理は何か、を明確にする必要があると思いま

す。

この点、白樺思想は大学の公共哲学とまったく異なります。

思想の原点を日々生きる生身の人間、生活者であることに求め、個々人がすべて異なる欲望存在であることを真正面から正直に認める。このことの深い自覚が他者に対する配慮と尊重を生みだし、そこから自ずと公共性が開かれていく。一人一人が、何より主観を大切にして、よき人生とは何か、よりよい社会とはどのようなものかと問い、自由で対等な対話を生活の中で日々実践するところに「民から開く公共」が始まる。原点を個々人のありのままの主観に置き、それを互いに鍛え合う自由対話に依拠するというのは市民社会の原理であり、世界に通用する普遍性を持つ思想だ。個々人の実存から発する「民から開く公共」は必然的に地球的規模の公共につながる。

これは、武田さんから学んだ私なりの白樺思想の理解ですが、ここには「民の公共」の意味とそれを実現するための方策について、基本となる考え方が簡明に示されています。ふつうの人なら誰でも理解可能で、「そうなんだよな」と腑に落ちる感覚を持って実践することができる、まさに哲学の原理であると思います。一般市民において「異」を前提とする「対話」は、このような思想に基づかなければ成立しないでしょう。討論会での金さんの発言も、私が理解する白樺思想とその芯はほとんど重なるものだと感じました。

「民から開く」という意味で言えば、大学人中心の公共哲学より市民の集まりである白樺の思想の方がはるかに優れているというのが私の実感です。また、市民が求める哲学（人生や社会のありようを深く問う哲学）が白樺の方にあるのは事柄の性質上当然であり、これは、もはや否定しようのない事実だと思います。もともと哲学も公共も、ふつうの市民の生活世界から出てくるものであり、そうである限り、大学人中心の哲学・公共哲学はその存在意義を根本から問い直す必要に迫られているように思えてなりません。

ところで、今日、公共哲学は特に公務部門において注目されつつあるようです。しかし、私は、それを大学人中心の公共哲学に求めることに強く批判的です。全体の奉仕者（憲法15条）である公務員こそ公共哲学を身につけておくべきことは間違いありませんが、そもそも「民から開く」という哲学が十分に展開されていない状況で、大学教師が公務員に「公共とは何か」を教えることは甚だしい矛盾に他ならないからです。また、公務員が「公・私・公共三元論」を哲学的原理のように捉え、それを知識として覚えるだけで、その意味や働きについて深く考えることをしなければ、形だけの「公共」となり、タウンミーティングの「やらせ質問」のような公共性に反する有害な結果を招くおそれがあるでしょう。白樺のような対等な対話・討論を生み出す哲学を背後にしっかり持たなければ、対話・討論は形だけのものにしかならないはずです。

大学の公共哲学が公務部門において真に有用なものとなるためには、民から開く公共哲学の原理である白樺の思想を土台に、それを作り直す必要があると考えています。そのためには、大学教師も、まず一市民、生活者であるとの深い自覚の下に、その立場で思考し行動する必要がある、と自戒も込めてそう思います。それが実現すれば、大学の公共哲

学は、民主社会の基礎となる市民の日々の哲学実践に対し、その哲学史や哲学説の高度な専門的知識を活かし、側面援助が可能になります。まさに本来の「哲学する」ことが実現するのではないかと思います。一人でも多くの大学人の皆さんが、一日も早くこのことを理解されるよう願っているところです。

10.「偉い・劣る」とは無縁のところから希望はひろがる」

染谷 ひろみ（46才・主婦）

12月23日の白樺討論会で話したように、わたしが今思うことは、やはり自分自身や家族や身近な子供たちのこと。

近所の小さな子どもたちと触れ合う時がたまにあるけれど、幼い子はほんとうに生き生きとしていて、人が本来持つ〈よい・悪い〉をみんな持っています。そのままの姿をさらけ出して、どんなことでも、「どうして？」と聞いてくるし 鋭く的をついた面白いことを言い、平気でやるからハッとさせられる。

小さい身体から無限の大きさと希望を感じると、逆に子供に守られているみたい。大人のほうが「ありのままでいいんだよ」って優しく肯定されて包まれてしまう感覚になるときがある。

でも大きくなる程(小学生くらいでもすでに) その生き生きした心と体が狭い固定観念に閉じこめられて壊れていくのが分かるのです。 表情から豊かさ・伸びやかさが消え、話す言葉は親や教師らの固定観念を映したものになってしまう。

近所のA君に表れた変化もその一つだ。問題は大人の世界にある。人一倍感受性の強いA君は、小学校に入り固い枠に閉じ込められると、ひどい拒絶反応を起こして親を困惑させていた。タケセンに出会って（白樺教育館のソクラテス教室に通うようになって）からのA君の驚くような変化は、傍目にもはっきりと分かり、それはほんとうに喜ばしく感動的でさえある。子供の情緒が安定し、生き生きした感じが戻っただけではなく、以前には見られなかった明るさと活発さが現れてビックリ。目の前で「奇蹟」を見る思いがした。

わたしたち大人は、なぜ、ソクラテス教室に通うことでA君が自分を取り戻せたのか？そのことに気がつかないといけないと思う。ただ、これほどおかしな情報があふれている社会で暮らしていては、一人で考えても無理だし固定観念にひどく縛られている大人同士で話しても、内容が薄っぺらで堂々巡り、何の進展もしない。

わたしは、2年ほど前からタケセン（武田先生）が主宰する「愉しい哲学の会」に通うようになってから、白樺教育館で実践している 民知の思考（自分の頭で考える実践）は実際の生活の中で一番重要で土台になるということを痛いほど感じるから、自分自身、家族、 そしてほんとうによいことは？を追い求める心をやめていない周りの人たちと 対話を続けてい

きたいと強く思っている。

何かの疑問にぶち当たった時に、そのことは一体どういうことで、何に・どこに問題があるのかを突き詰めて話していくとすごく楽しいし充実感がある。近所の人と悩みを話し合っていた時に、人を変えようと考えるのは無理だし変だよね、じゃあ自分の思考をこんなふうにもってみたらどうだろうって話し合ったことがあるけれど、その時のその人の、キラっと輝いた目が焼きついている。

ああっ、こんな対話を続けていけるのは幸せだなって感じた。こんなふうに自分で自由に考えて話すことができるのは、白樺教育館が誰にも何にも負けないで、民知の実践を力強く進めているからだと思う。今年で31年目だそうだ。凄い！

金泰昌さんを中心に公共哲学を進める学者の人たちが白樺教育館に関わってきているのは 、とてもよいことだと思うし、面白い。これから更に「本当の対話」がなされていけば、キムさんの並々ならぬ覚悟がよい成果を上げることができると思う。とてもたのしみ（笑）。ゆっくりと大きな大きな革命がおきるべく進んでいるような気がする。

誰が偉いの劣るのということとは無縁なところで、ほんとうに自分の考える頭が動くと、限りなくひろい思考と希望があたりまえのようにあるんだ、そうわたしは感じている。

11.《大いなる希望「民知」》

楊原 泰子（60歳）

6月に続いて行なわれた12月23日の金泰昌さんと武田康弘さんを軸とした「白樺討論会」への参加が叶わなかったので（6月の会には参加）、討論の内容からは外れてしまうが、最近体験したことなどから白樺教育館の「民知」への想いを書いてみたい。

私の知人の故郷では戦時中、中国・朝鮮から強制連行されてきた人々が劣悪な環境下で、まともな食事も与えられずに働かされていた。重い荷物を担いで山道を登らされていたその人たちの気の毒な姿に同情した村人たちは山道の途中で小さな一口大のおにぎりを隠し持って立ち、山から下ってくるその人たちの口の中におにぎりを入れた。これを見つからないように続け、多くの人が救われ、戦後、解放された人々が村の人たちに会いに来てくれたそうだ。

この村の人々は偏った価値観に惑わされず、体制に流されず自らの良心に従い行動した。当時このような行為はかなり危険なものであったにも拘らず、気の毒な人たちを見て行動せずにはいられなかったのだ。

過去を振り返る時、いちばん感銘を受け、勇気を与えられるのは、英雄と評された人の

超人的な行為ではない。名もなき人々のささやかでも良心にそった誠実な行為だ。あの厳しい時代でさえ声を上げ行動した人々がいたという事実は現代の我々に大きな勇気を与えてくれる。社会を見る“ものさし”に普遍性を持ったこのような人々が多くいれば歴史は違う方向に動いたかもしれない。いかなる時代や環境においても一人ひとりの人間は社会を変え得る大きな可能性を秘めているのだ。

イデオロギーや政治的な体制によって社会を変えるのではなく、市民の心のうちからのよりよき社会構築を目指し、この一人ひとりの実存によって支えられる社会への変革を実現する土台になるのが「民知」であろう。

普通の人々の生活世界の体験に根ざす、生きた知である「民知」を基とするこの考え方こそが本来の哲学なのだと感じている。長い時間を経て、専門知と化している学としての哲学では、人々がよりよく生きるためという基本理念から離れがちで、そうなれば言葉だけが空回りすることになり、足元が崩れてしまうに違いない。「民知」という考え方は、学としての哲学の伝統という視点からではなく、人が生活世界においてよりよく生きるためにという基本的な理念に常に立脚している。個々が互いの存在を認め合いながら、よりよく生き合う社会を目指すことで、自立した市民が育ち、自ずと真の公共的な役割を果たすことが出来るだろう。

過去の記録を読む時、この先どんな時代が来たとしても異を唱えることが出来る勇気と真実を見抜く力を持ちたいと願ってきたが、既に今、声を上げねばならない時代に一歩足を踏み入れてしまったようだ。一人ひとりが自らの生活体験に照らして思索し、その思いを素直に表現できる社会を作っていくことが、今、何よりも大切なことだと思う。

いつの時代でも、国は民意の方向に動かされてきたわけではなく、一部の権力を握った人々の利益のために偏って導かれてきた。生活感や市民の苦しみへの想像力に欠ける政治家や官僚、一部の学者によって動かされる未成熟な社会に希望はない。現在の日本の閉塞的な状況を克服し、誰もが安らかに暮せる「たしかな明日」を築くためには「民知」という考え方こそが大いなる希望である。

まず私自身が市民としての精神的自立を目指し、よりよき生き方を追及することから始めたいと、この新春に思っている。

12. ふつうの言葉で討論を

中西 隼也（青山学院大学経済学部4年）

今回の討論会では、以前行なわれた金さんを迎えての討論会と同様に公共哲学の核の部分について話し合われました。公共哲学とは公共する哲学であるため動詞的な性質を持っていることや「異」であることを認め合うことで「和」が生まれるなどの本筋の話から、法文、論語、さらには漢字の語源の話まであり、僕は得るものが多くありました。

しかし不覚にも私は、山脇さんや稲垣さんとの討論会そして最近の「白樺メーリング」の内容から、今回の討論会では公共哲学の三元論などの公共哲学の方法論についての対話がなされるのだと思っていたので、いつその議題になるのかを待ちながら聞くことになってしまいました。そのため、私は今回の会では確かに得るものはありましたが、物足りなさも感じました。金さんはこれから連続的に白樺教育館に足を運ばれるそうなので、そのときに三元論などをテーマにした議論をし、公共哲学をより豊かなものにしていけたらいいと思います。

ただ今まで討論会に参加して来ていつも気になるのは、来館された大学教授の方々の話に外国語や専門用語が多く、また学者の方特有の言い回しがあり、何を主張したいのか？がよく分からなくなることです。これは討論会に参加する上で勉強不足だと言われればそれまでですが、対話をするときは自分の主張が他者になるべく正確に伝えられなければ自他共に「損」しかありません。白樺討論会に限らず、公共哲学を深め・広めていくためにはなるべく日常使われる平易な言葉で話されたほうがいいのではないでしょうか。また、対話をするときに一人が長く主張を述べていると、それを聞いている人は所々で疑問があっても話を最後まで聞こうとしているためにすぐには質問できません。その結果、もやもやしているうちに次の話題に移ってしまい、質問ができなくなってしまうことがあります。これは聞いている側も、話の途中でもうまく介入して、もっと対話するよさを引き出さなければいけないと思いますが、話される方も明瞭に短い時間で話す必要があるのではないでしょうか。

これからの白樺討論会では発言する人は皆がわかるように話し、発言を聞く人は疑問があったらその場で質問をすることを心がけると、討論会自体がもっと面白いものになると思います。討論は「ふつう」の言葉でしなければ内容が深まらない、と感じました。

13. 哲学を革命する民から始める公共哲学

内田 卓志 （会社員）

昨年の 12 月 23 日、白樺教育館で金泰昌さんとの対話会で私は次のような意味の質問を行いました。

私:「金さんの考える公共哲学とは、対話する・共働する・開新する三次元相関関係（固定的ではないダイナミックな精神とその実践）にあるものであり、哲学する・共に哲学する・他者と共に公共哲学する、民から開くものですね。それには同を求める精神から決別し、異を尊重し和を実現すると考えてよいですね。この様な公共哲学の精神と実践には、すべて賛成し共感します。では今なぜ公共哲学なのか、単に哲学ではだめですか？金さんの言われていることは哲学本来の営みであり、例えば西洋だったら古代ギリシャ以来、東洋だったらインドのブッダ以来の哲学の意味だったのではないでしょうか。」

金さん:「古代ギリシャにおいても自由市民だけの特権的なものでした。奴隷も女性も哲学的対話には参加できませんでした。その様な一切の差別を排して哲学する一つまり公共哲学することが、現代にもっとも必要なことだと思います。あえて公共哲学を手段や戦略としてではなく“原理”として標榜し実践していくことに公共哲学の現代性があるのです。原理としての公共哲学を広め普遍化していくことに命を賭けているのです。」

私にとって、金さんの発言は、強烈かつ衝撃的でありました。それは正に、明治以来の日本の哲学的パラダイムを、いやギリシャ以来の西洋哲学の主流と思われていたパラダイムまでも結果的にチェンジすることになると思われたからです。

明治以来日本では（ここでは思想と哲学を区別します）哲学とは、デカルト・カント・ヘーゲル他の大哲学者と言われる人の哲学書の解釈及び哲学史学が主流であり、これぞ哲学でございますとばかりに二拍手“パシ・パシ”と神棚に祭り上げる正に専門知の代表選手でした。私たちはかつて、集団同調性の強い民衆性にこの専門知を“バスに乗り遅れるな”とばかり悪用した歴史的恥辱を経験しているはずです。最近は、『哲学者のいない国』とのことで、西田幾多郎、廣松渉や大森荘蔵といった人が数少ない哲学者だとする意見もあります。ただ、私にはこの意見も専門知哲学から逃れることはできない様に思われます。（確かに廣松氏らは哲学者だと思いますが、哲学とは存在とは何か？とか時間とは何か？を議論する専門家だけのものではないはずです）

この様な専門知としての哲学的パラダイムをチェンジして、本来の哲学＝「個人の主観性を鍛え育てエロースをこの心身で感じ受け取ることができる全体知としての哲学」を原理とする（武田白樺教育館長の言う恋知としての哲学＝民知）ところへ、回帰するところから、

公共哲学もスタートするからこそ現代的意義があると思われます。そうだとしたら、まさに“哲学の革命的運動”です。（革命の原義は回転とか回帰であり、よき伝統や営みに戻ると言うこと）

今公共哲学が求められる理由は、この様な原理を踏まえつつ、「誰でも・いつでも・どこでも・ただで」哲学することができる点にあると思います。つまり、公共哲学の専門家などはいないことがある種の特権（逆説的ですが）とも言える『普通の人の知』だからでしょう。

ただこのことは大問題でもあります。日本ではいまだかつて、個人の生活世界で哲学的思考を活かし働かせる習慣も伝統も大変希薄だからです。西洋には哲学的議論を普通に母語で行う習慣のある国もあると聞きますが、日本ではそうはいきません（西洋では日常語がそのまま哲学用語であり、日本のように哲学用語をあえて作り専門化する必要がなかった）。『対話する・共働する・開新』することを原理とする公共哲学は、民からこそ行えることでしょうが、大変な“価値転換”を伴うはずです。だから金さんが命を賭けるのでしょう。ただ、こうした実存からの思考は、古くから日本にもありました。親鸞を始め、鎌倉新仏教の祖師たちも、内面の真実につき命がけで旧仏教の価値転換を図り、その思想を広く民衆のものにしたのです。

最後に金さんの夢、『公共哲学により日本・朝鮮・中国の人々の幸福と平和を実現する』（アジアから世界へ）その夢を共有したいと思います（武田館長は、幸福とは結果として感じられるものであり、目的として追求するものではないと主張しますが、このことについては詳細な説明が必要ですのでここでは触れません）。それには、学者もビジネスパースンも職業・年齢・性差に関係なく裸の個人・市民として無条件に一切の権威を排し、他者と公共哲学すること＝自由な対話が求められるはずです。公共哲学が、一部の専門家の独占物になったら既存哲学と同様に『神棚哲学』に堕することになります。公共哲学の原理上、民（市民）の力を求め、民から開くしか径（みち）はないはずです。その困難性の自覚が最も必要に思えてなりません。ただ希望はあります。私のように最近このようなことを考え始めたものと違い、「白樺」は30年そんな困難なことを実践してきているのですから。この小論も武田館長から哲学の原理上の意味を学んだ結果です。

異（差異・違い）を尊重し真摯な知的誠実さを持って一致できるところから共働・協力していきましょう。